

創作×ご飯の合同誌

Companio

[カンパニオ]

2016 夏号

Vol.2



目次

麦わら帽子 古井久茂

三十路リーマンと少女の夏。 ボンゴレーノ麴

牛丼を食べながら 篠田くらげ

言い訳のお弁当 豆崎豆太

フレンチトーストと君 巫夏希

星影のティーブレイク つん

参加者一覧

麦藁帽子

—— 古井久茂

オリンパスのミラーレスカメラの液晶画面を見つ

める。頬に感じる汗を、肩で拭う。液晶には、鮮

やかで濃厚な黄色い花が並んでいる。人差し指で

液晶を触り、次の写真を表示させる。手前のボ

ケた黄色の奥に、大きな花の黄色が続いている。

俺の座っているベンチが、少し揺れた。顔をあげ

ると、目の前にコップがある。土居さんだった。麦

藁帽子をかぶった土居さんが俺の隣に座っていた。

「満足するの、撮れたか」

俺はうなずいてコップを受け取る。

「ありがとうございます。凄かったですね。デート

に来る観光客もいるんじゃないですか」

土居さんは麦藁帽子を脱いで顔を扇いだ。それ

から、ゆつくりと麦藁帽子をかぶりなおす。

「こんな山人中、来ねえよ」

「宣伝してないからですよ。養蜂体験もできて立

派なひまわり畑もあって、いいじゃないですか」

そういうと、俺はコップに口をつける。冷たい甘

酸っぱさが口の中を通りぬける。酸味も甘味も

さっぱりしていて、少しやさしい感じがする。

「美味しいです。梅ジュースですよね」

「ああ。ここでは蜂蜜で漬けてんだ。好みなんだけ

ど、砂糖で漬けると梅が主張して、蜂蜜で漬ける

と梅の味の角が取れる感じになる」

「ちよつと待つてください」

俺はミラーレスとコップを置いて、ポケットからスマホを取り出す。タップしてメーカーを立ち上げて、自分宛のメール作成画面にする。

「梅を強く感じたいなら砂糖で漬けて、まろやかにしたいなら蜂蜜、ですね。ここで漬けてむとときに使っている蜂蜜は何の蜂蜜なんですか」

「わかんねえ。百花蜜だ百花蜜」

「わからないって、どういうことですか。ちよつと説明お願いします」

「花の蜜が取れるところを蜜源っていうんだけど、

セイヨウミツバチは蜜源を見つけるとその辺りか

ら集中的に蜜を集める習性がある。ほら、スー

パーとかでレンゲ蜂蜜とかアカシア蜂蜜とかあるだろ。同じ場所から集める習性があるから、そこに同じ植物ばかりあれば、その植物の蜂蜜にな

るってわけ。だけど、ここで養蜂に使っているのはセイヨウミツバチじゃなくてニホンミツバチなんだよ。ニホンミツバチは同じ場所から蜂蜜を集める

習性がない。色んなところから蜂蜜を集めてくる。

それに蜜を集める能力がセイヨウミツバチほど大きくないから、年に一回しか採蜜できない。つま

り一年を通して集めた蜜が混ざっていることにな

る。そうになると、何の花の蜜だか、もうわからねえ。そういう、色んな花の蜜が混ざって何の花の蜜だかわからなくなっている蜂蜜のことを百花蜜っていうんだよ」

「ちよつと待つてください。早いです」

俺はセイヨウミツバチとニホンミツバチの習性と蜂蜜の違いを入力する。それを、こういうことですか、と土居さんに見せる。

「んん、セイヨウミツバチでもニホンミツバチでも、色んな花の蜜が混ざっている蜂蜜は百花蜜だ。ニホンミツバチだとよほどのことがないと百花蜜になる。あと、数字の百に花の蜜で百花蜜な」

俺は、はいはい、と言って、習性する。コップの梅ジュースをひとくちふたくち飲む。それから、土居さんの顔を見る。麦藁帽子の影に隠れた横顔は、どこを見ているのかわからない。

「ここではニホンミツバチを育てているんですね。

何で土居さんはニホンミツバチで養蜂しているんですか」

「ああ、そうそう。ここではニホンミツバチで養蜂してる。何でニホンミツバチかっていうと、単純な話だ。そっちの方が蜂蜜が高く売れるから」

「高く売れるってことは、高く売れるなりの理由があるんですね」

「そりゃあな。採れる蜂蜜の量が少ないとか蜂蜜を取るのに巣を潰さないといけないとか。そういうのが、いろいろ」

巣を、潰す。何となく、引つかかる。育てているミツバチが作った生きるための巣を潰すって、普通じゃない。

「もう少し詳しく聞いていいですか。採れる蜂蜜の量が少ないってのは、先ほどの話ですよね。セイヨウミツバチよりニホンミツバチの方が蜜を集める能力が小さい、っていう。巣を潰すっていうのは、どういうことですか」

「テレビとかで蜂蜜を採っているのとか、見たこと

あるだろ。ぐるぐる回して遠心力で飛ばすのとか。

あれ、全部セイヨウミツバチなんだよ。ニホンミツバチは巣の構造が違うから、あれができない。できねえから、巣の一部を切り取って、潰して圧力かけて蜂蜜を採るんだよ」

「他に方法はないんですか」

「他の方法か。どうだろうな。俺は知らねえ」

「少しかわいそうですね」

「そう言われてもなあ。そういうもんだとしか」

俺は慌てて首を振った。そういうつもりじゃない。

土居さんが悪いわけじゃない。

「すみません、土居さんを責めるつもりはないん

です。ごめんなさい」

「何かを食べるって、何でもそうだろう。肉や魚だけだと思ってたのかもしれないけど、野菜だってそうだ。育てるあいだに沢山の虫を殺す。そもそも田んぼや畑を作るってだけでも、そこに住んでる生き物を殺したり追い出したりするってことだからな。人間だけじゃない、他の動物だってそうやって生きているんだから」

「はい、そうですね。すみません」

「別にいいよ。何か食べ物を作るところに関わってないと見えてこないことだろうし」
「ちゃんと、記事に書いておきます」

土居さんは、ははは、と笑った。それから俺の肩をばんばんと叩く。少し、痛い。命を食べる、なんてありふれたキャッチコピーを思い出した。あれはどこで見たのだろうか。たぶん、一度や二度じゃない。俺はコップの梅ジュースを飲み干す。

「そうそう、ひまわりのことも確認しておいていいですか。確か遊休農地の利用ってアイデアでしたよね」

「アイデアっていうか、他の地域でやってたことだねだよ。遊休農地をそのままにしておくとか荒地になって、また農作地として使おうとしたときに苦労する。だから、そういう荒地になっちゃって

る遊休農地に土をあまり選ばないひまわりを植えて、育った茎を肥料にしたりしながら、農作地として復活させる。同時に、ひまわりの種から油も採る。それだけのことを、もう色んな地域でやってるから、それをマネしただけ」

土居さんは、マネしただけ、なんて言う。言うけれど、それがそんな簡単な話じゃないことはわかる。それに、脱サラするのだから相当な勇気が必要だと思う。イイカゲンな小さな会社にいる俺だって、脱サラなんてムリだ。

「いやいやいや、凄いいことですよ。でも、どうして山の中の遊休農地を選んだんですか」

「まずは山ん中の方が遊休農地が多いんだよ。そりゃそうだよな、山ん中だと往復するだけでも面倒だし。それから、周りの田んぼや畑から農薬が飛んでこないから有機栽培がしやすい。日本の野菜は農薬ガンガンだからねえ。中でもネオニコ

チノイド系の農薬がミツバチの大量死の一因として指摘されてて、それを避けたかったんだよ。遊休農地の利用と平行して養蜂をやりたかったからね。だから有機栽培にしたんだ。で、そのネオニコチノイド系の農薬なんだけどさ、二〇一五年に基準が大幅に緩和しちゃって。残留農薬が多くて輸出できない、って話は前々から多かつただけ

ど、これからどんどん増えるよ。でも、そんな野

送るよ。メールでいいよな」

菜が国内で流通する。輸出できないから、国内で

「すみません、お手数おかけします」

消費する。自分では食べない、なんていう生産者

俺は小さく頭を下げる。顔を上げたとき、土

さんもいる。ひどいよね。ひどいんだけど、とりあ

居さんのアゴ先からひとしずくの汗が落ちた。こ

えず、そうなっちゃった。そうなっちゃってる」

の人は、いつも俺を置いて先に進んでしまう。土

「ストップ、待ってください。追いつかないです。えっ

居さんだけじゃない。他の先輩もそうだった。先

と、ネオなんとかって農薬の話ですよね」

輩だけじゃない。後輩だって俺を追い抜いて遠く

土居さんは。べちべちと自分の頬を叩いた。

に行ってしまう。

「ああ、ごめんごめん。話がズレちゃった」

土居さんは小さく息を吸った。

「この話もおもしろいんで記事にしたいんですけど、

「さっきの話を続きなんだけど、日本の農業には

すみません、追いつかなくて」

そんな農薬の問題がある。だけど流石にこの問題

「早口だったよな。悪い悪い、あとで資料と一緒に

は露骨だから、もう五年か十年もすれば日本も

有機栽培が見直されると思うんだよね。そのとき有機栽培のノウハウがすでであれば強い。他より一歩進んでいることになる。まあ、そんなわけです有機栽培がしたかったんだけど、そのために相応しいのが山ん中だったってわけ」

「なるほど。先を見通した戦略ってわけですね。その有機農法で育てたひまわりの油の評判は、どうですか」

「いいよ。有機栽培低温圧搾のサンフラワーオイルなんてなかなか手に入らないからねえ。生産が追いつかなくてごめんなさい状態。このひまわりが終わったあとには蕎麦を植えてるんだけど、こっ

ちも人気だねえ。場所を増やしたいんだけど、近くの遊休農地はだいたい声をかけちゃったから、これ以上借りるのは厳しいかもしれない。人手も足りねえし」

「嬉しい悲鳴ってやつじゃないですか」

俺がそういうと、土居さんは笑った。

短歌×ミード企画！

サークル fulidom では、短歌とミード(蜂蜜酒)の企画を進めています。

多数の豪華ゲストを迎え、第四回文学フリマ札幌(2016年9月18日・堺市産業振興センター イベントホール)にて初お披露目します。

乞うご期待！

詳細はツイッターアカウント
@fulidomにて

三士路リーマンと少女の夏。

ボンゴローノ麴

110Kのアパートの外で、蟬がその命をうるさく燃やしている。扇風機の風量を最大にした室内で、小さな女の子は塗り絵が飛ばされないように必死で押さえている。

「とんじやうー」

「昇いって言ってたじゃん」

後輩の娘を入り浸らせるのもどうか、とは思うのだが、あまりにも自然に生活に溶け込んでしまっている。それこそ最初に断っておかなければならなかった。

春には一緒に花見にも言つてやった。若いサラリーマン風の男と幼稚園児の少女が公園を歩けば、壮年の人たちによく声をかけられた。その態度、少女はふふう、と自慢げに鼻を鳴らした。たぶん、自分がかわいいから声をかけられたと勘違いしているのだろう。それは半分正解で半分不正解だ。誘拐されてないか、誰かめてたんだよ。

冷蔵庫を開けると、缶ビールの横にリンゴジュースの小さいパックが並んでいる。これは今口のおやつに、と少女の父親から持たされたものだ。この暑さではすぐにぬるくなってしまふので、ここに避難させたのだ。

時計の針は十一時を回っている。持ち帰りの仕事をしていた手を止め、台所に立つ。シンク台の上になな板を乗せ、ラップを敷

く。小麦粉を撒いてから、冷蔵庫の中に寝かせておいたタネを取り出した。仕掛けはないので、鳩は飛び出さない。

なあに？、それ

色とりどりのクレヨンに染められた指先が、取り出された皿の中身に向けられた。いつの間にか飽きてしまった塗り絵が、あわれ扇風機に飛ばされている。あとで部屋をきちんと片付けさせよう。そう思いつながら、ちよつと待つてな、と言った。

「昼ご飯を作るんだよ」

白くて丸いそれを、まな板の上で、力を入れてぐいぐいと伸ばしていく。延べ棒が無かったので、サラララップの芯の中に擦り棒を入れて補強したものを代用としてみたが、なかなかどうして二手くいく。伸ばして、畳んで、その繰り返し。

危ないからもうちよい離れて」

「ヤ、見てる」

ダメエー

間延びした返事を返して、ちよいちよいと膝で横に居た少女をつついてやる。ふ、と頬を膨らませた後、一歩横にずれた。

鍋にたっぷり水を張り、蓋を閉めて沸騰させる間に、包丁を取り出す。何事も折リたたまれた白いそれに、慎重に包丁を入れていく。

とん。とん。

きつと少女の母親が奏でる包丁の音よりもずっとゆっくりだろ
うその音が、狭い台所に響いた。





最後までどうにか包丁を入れることに成功したころ、同じくして湯が沸いた。ぐらぐらと煮えたぎる鍋の中に、今しがた切ったばかりのものをばらばらとほぐしながら投入する。

そのまま数分、ぐらぐらと。

「まだ?」

「まだ」

時折箸でかき混ぜながら、最後にコップ一杯の水を注いで、火を止める。あらかじめシンクの中に置いておいたポウルに重ねられたざるへ、湯に気を付けて中身をあげる。

ざあっという音と共に、真っ白い湯気が立ち上る。額に湯気がかかり、ぼつ、という汗の玉になった。

「はいお手伝い」

椅子を持ってきて、彼女をその上に乗せると、ちょうどシンクの中を覗き込む形になる。大きなポウルの上にざるを重ねて、水道の蛇口を捻った。右腕で手を洗わせて、色が亡くなったところでポウルたちを渡す。

「お水でこれ洗って。ぬるぬるしたのが取れるまでね」

うん!と満点の返事があり、小さな手のひらが水の中に入っていく。

「おうどん!」

「素麺だよ」

「うそだよ!」

少女はきやあつと笑って、ざるの中をかき混ぜる。

なんとなく手製で作ってみた素麺は、素人にはレベルが高かった。彼女の指よりは細いけれど、市販の素麺よりはずっと太いきしめんと言われても苦笑するだけで否定できなさそうなそれを一本持ち上げてすすする。つまみくい!という高い声で聞こえたが、これは味見、とだけ言った。大人特有の言い訳だ。

ざぶざぶ泳がせた太い素麺を引き上げて、大きい白い皿へと盛り付ける。海苔はハサミでざくざくと、ネギは小口切りでざくざくと。錦糸卵なんて作れるはずもないので、冷蔵庫で寝ていた卵を叩き起こして真っ二つに切った。

「おいしい!」

「まだ盛っただけで食べてないけど」

「ううん、ぜったいおいしい!」

麺つゆに氷を浮かべて、彼女にはフズクを。

あちこちに塗り絵が散らしている部屋で、いただきますをする。彼女はきつと、今日、ここでうどんを食べたの!と両親に報告して父親が悔しがることだろう。

「今度、パパにも作ってもらいな」

忙しい彼女の両親では、なかなかこうしたことまでできないだろう。それも彼女たちの家の形だ。

「……うん!」

けれど、こうして笑う彼女を見られるのは、そう悪くない。ゆで卵を小皿に取って渡してやる。とココが卵を食べているみたいなのその姿に、こちらも少し笑ってしまった。

牛丼を食べながら

篠田くらげ

「牛丼を食べたことがない？」

「ないな」

答えた俺に、嘘でしょと光平は目を丸くする。

「うわ、ブルジョアだ」

「意味わかんねえよ」

光平を見る。本気で感心した風だった。やれやれ、という様子で頭を振っている。髪からかすかにシャンプーの香りがした。

「お昼とかどうしてたの」

「ラーメン、ファミレス、マック。そんなとこだな」

「なんで牛丼を回避するかな」

ますます呆れたようだった。呆れられる筋合いはない。たまたま食べなかっただけだ。別にブルジョアとは関係ないだろう。そう考えていると光平は言った。

「じゃあ僕が作ってあげましょー。お昼だしちょうどいいよね」

なぜか嬉しそうだった。光平のやつ、料理なんかできたんだろうか。料理をするのはいつも俺の役割で、光平は食べる専門だった。光平いわく「良亮が作った料理を僕が美味しく食べる。それが愛情表現だよ」と。それこそ意味がわからないが、とにかく俺たちはそうやって暮らしている。もう何か月前になるだろう、光平の告白を俺が受け入れたのは……。

「じゃーん。鍋でーす」

俺の思考がさえぎられる。どうやら本当に牛丼を作るつもりらしかった。それにしても気楽そうな様子でしゃべるガキだ。

「料理、できるのかよ」

一応たずねてみる。変なものを食べさせられてはかなわない。

「うーん。たぶん？」

不安なことを楽しげに言うと、光平は玉ねぎを刻み始めた。けっこうサマになっている、
ような気がした。

「うー。目に染みるね」

袖で目をぬぐっている。エプロンくらいしろ、と俺のエプロンをきせかけてやると、あり
がと、と声がした。

「えーと次は？」

「おい、大丈夫か」

「大丈夫。さつきクックンとかで見たから」

料理サイトの名を挙げる。一応予習はしたらしい。

「じゃ、よろしく頼む」

「あーい。ねえ、新妻っぽい？」

言ってる、と答えてキッチンを出る。ほどなくして牛井が運ばれてきた。

「お待たせいたしましたお客様、牛井並盛でございます」

自慢げである。たしかに牛井だった。それ以外に作りようもないはずだ。

「いただきます」

「いただきますーす」

ふたりで声を合わせて食事を始める。おそろおそろ口にしたそれはチープで、でもなかなか美味かった。味付けも悪くない。意外な才能だな、と俺は思う。

「ねえ、どう？牛井童貞を失った感想は？」
むせる。

「牛井童貞ってなんだよ。意味がわからん」

「はじめての牛井、奪っちゃった」

「奪うとかあるのか。まあ、美味い」

あまり相手にせずに牛井をかきこむ。光平はなんとなく不満そうだったが、おとなしく牛井を食べている。

「ごちそうさまでした」

やはりふたりに声を合わせて挨拶をする。と、光平の唇が唐突に俺の唇に重ねられた。

「ねえ、今のキス、どんな味？」

「牛丼だな」

「色気がないよう」

不満そうである。だがガキに振り回されるほど安くはない。キッチンに皿を下げ、じゃぶじゃぶ洗う。これはもちろんお手の物だ。料理係は伊達ではない。

戻ると光平の姿がない。家の中を探すとベッドの中に光平がいた。

「なにやってんだお前」

「お客様、デザートなどいかがでしょうか」

「あのなあ」

言いながらもベッドの中にもぐりこむ。このままふたりで、いろんな初めてを作っていくのだろうか。なんとなくそう思いながら。

- ・糸こんにゃくで菌ごたえに変化を出しました。三つ葉を添えてもよかったかな。(光平)
- ・じゃあ、はじめからそうしろ。(良亮)



言い訳のお弁当

豆太

恋人が部屋に戻ってこなくなって二日が経つ。

破滅の危機とかそういう話ではなく、単にシステムトラブルの緊急対応だとか何とかで会社に泊まり込んでいるだけだ。恋人の仕事の話はさっぱりわからない。

一緒に部屋で寝起きするようになってたつた半年、それなのにもう、ほんの二日で耐えられなくなるほどには恋人の居る生活に慣れてしまった。時刻は二十二時を回っていて、ついさつき、ごめん今日も帰れない、と連絡が入ったところだった。

『仕事と私とどっちが大事なの』

『それ言いたいだけでしょ』

『チャンスかと思って』

二、三のやり取りの後、メールの返信が途絶えた。工作中だろうから仕方ない。寂しい、会いたい、帰ってきてほしいと言うことを社会人のプライドが許さず、好

きなことを仕事にして今まさに奮起しているだろう恋人にわがままを言うわけにもいかず、枕を抱えてしばらく悩んだ後で、司は包丁を手に取った。

鶏もも肉をぶつ切りにする。続けて人参、ごぼう、れんこんも乱切りに。根菜類は水から軽く茹で、ざるにあげておく。

ごま油を敷いたフライパンで鶏肉に軽く焼き目を付けたら、火を通しておいた根菜類と炒め合わせる。フライパンに酒を入れて鶏肉に火が通るまで蓋をして蒸し、砂糖、醤油で味をつけて照り煮にする。

酢を入れようか少し考えて、やめた。代わりに白ゴマをまぶす。

ほうれん草は根元の部分に切込みを入れ、水に浸けてよく洗って、根本から沸騰したお湯で湯がく。いち、にい、と数えて三十秒。葉の部分もお湯に沈めてから三十秒。冷水にとって絞り、出汁醤油を掛けて置いておく。

卵ふたつを溶いて、顆粒のだしとちよつとの水、それから同じくちよつとの醤油で

味をつけてフライパンで焼く。少し焼いて巻き、少し焼いて巻きを繰り返しただし巻き卵は、恋人のお気に入り。

二段重ねのお弁当箱のうち、片方にご飯を詰めて薄く切った茗荷の甘酢漬けを乗せる。この時期にはさっぱりしておいしいご飯になる。

「よし」

紙袋にお弁当と替えのシャツとを入れて部屋を出る。

そろそろ俺の手料理が恋しくなる頃だから。きつとシャツも替えられなくてうんざりしているだろうから。

言い訳なら用意した。だから大丈夫。

『今、外にいる。出て来られる？』

『すぐ行く』

*

部署に戻ってお弁当を開ける。水筒の中身は温かいお茶だった。ここ二日まともに感じていなかった食欲が急に膨らむ。

同じく残業していた先輩がコーヒーを片手に和樹の背後を通りかかり、お、と声を上げてその手元を覗き込んだ。

「何それ岩橋、愛妻弁当？　つかよく見るとシャツ替えた？」

「恋人が、さつき下まで持ってきてくれたんです」

柄でもない自慢が出たのは、たぶんそれくらいには寂しくて、それくらいには嬉しかったせいだ。普段は隠して独り占めしておきたい気がするのに、今ばかりは誰かに話したかった。これから部屋に戻って、和樹の替えたシャツを抱いて眠るのであるう恋人のことを。

「マジか羨ましい、一口よこせ」

「蓋の裏についた米ひと粒でも嫌です」

けちくせー、と文句を言いながら、先輩は近くの椅子を引きずってきて座る。鶏肉と根菜の照り煮、だし巻き卵、ほうれん草のお浸し。茗荷の甘酢漬けが乗ったご飯はさっぱりして美味しい。

コンビニで食事を摂るときはいつもパンかおにぎりで、食べながらキーボードを叩いていることも少くない。それを知ってか知らずか、恋人の料理は優しく、食ってる時くらい休め、俺の飯には集中しろとでも言われているかのようだった。

「つか何、マジでうまそう。彼女何してる人？」

「飲食で厨房に入ってるんです。調理師免許取りたいって」
彼女、という部分は敢えて無視する。

「うわー、いいなこんな飯待ってたら帰りたくもなるよなあ」

「だから早く帰らせて欲しいんですけどね」

和樹が言う俺に言われてもなあと先輩はげらげら笑った。先輩の一存では仕様も納期も変わらないのだから当然だ。

「さっさと結婚しちゃえよ、残業のし過ぎで愛想尽かされないうちにさ。こんな夜中にシャツと弁当差し入れてくれるような子、二度と捕まんねえぞ」

どうせ他の誰かを捕まえる気はない、と思ってから、結婚という甘やかな響きに一人苦笑する。

（愛想尽かされる前に、ね）

付き合うようになって四年、一緒に暮らし始めて半年、今以上の進展は存在しない。結婚という枠組みの外で暮らす日々を和樹自身は悪く思っておらず、恋人もまた気に入る様子はないが、実のところどうなのかと訊ねる勇氣はまだ無い。

『おいしかった。ごちそうさま』

空になった弁当箱の写真を添付し、恋人へメッセージを送る。恋人の眠りは深い。おそらく起こしはしないだろう。

『いつもありがとう』

愛してる、と打ち込んで少し笑ってからそれを消し、ありがとうまでを送信した。

フレンチトーストと君

君がフレンチトーストを作る、と言ったのは私が起きたタイミングのことだった。今日は日曜日。私も君もお休みだ。だからといってどこかに出かけようとかそういうことは考えなかった。そもそも私も君も外に出かけたがる人間では無かったからだ。ショッピングモールでデートをするよりも、一緒にゲームをしたい。そんな感じと言えはいいかな。面倒なだけじゃないか、と言えはそれまでだけれど。

ベッドから身体を起こして、カーテンを開ける。ご飯を作ることしか考えなかったのかな。まあ、それも君らしいといえは君らしいけれど。そんなことを思って、私は寝室を後にした。

今の私の恰好は黒のノースリーブにパンツというとてもラフな恰好となっている。きつと君はこれを見たらせめて下を履いてくれ、というのかもしれないけれど、まあ、面倒なんだ。それくらい君だって知っているだろう？

顔を洗って、リビングへ。テレビは既に点いている。君は音の無い環境で作業をすることは嫌いだっただけだね。特にテレビ番組が好きなわけではないのだけれど、ただ、我が家にはラジオが無い。

新聞を取りに外に出ようとして、私は下がパント一丁だったことを思い出した。仕方ないのでジーパンを履いてそのまま外に出た。まあ、ノースリーブでも別に大丈夫だろう。時刻は未だ朝の六時だ。休みだと分かっている、なぜだかいつもの時間に起きてしまう。……私もすっかり社会人としての悪い習慣が身についている。

私と君の家はマンションの三階にある。最寄り駅から十分もかかる、相場より少し安いマンションだった。とはいえ、徒歩五分圏内にコンビニエンスストアとドラッグストア、それにクリーニング屋まである。これだけでもかなり立地が良いように見えるかもしれないが、この前スパーが出来たことでさらにその立地は良くなった。しかも二十四時間。君はとても喜んでいたな。料理を作るのが好きだったから、かもしれないが。

新聞を郵便ポストから取り出して、読み進めながらエレベーターに乗り込む。ちょうどそのタイミングで降りてきた学生と会釈を交わした。学生は日曜日も勉強か、或いは部活動だろうか。いずれにせよ、ご苦労なことだ。

新聞の見出しには、イギリスがEUを脱退するとか、任天堂が新しいゲームを発表するとか、

スマートフォン新しい機種が発表されたとか、良いニュースと悪いニュースが上手い具合に配置されていた。

平和だな、と私は思ったけれど、まあ、新聞などそんなものだと思う。君は確か新聞やテレビのニュースを嫌っていたね。インターネットは良くも悪くも情報が早い。だからそのリアルタイム性が好きなんだ、って。分からないことではないけれど。確かに最近地震が起きててもテレビよりもツイッターのほうが早いし、それ以外のニュースでもインターネットのメディアが数倍早く情報を伝えてくれることもある。

けれど私はスマートフォンをあまり使い慣れていないこともあって……結局、それが出来ずじまいだった。スマートフォンを持っていても、ツイッターをようやく使うようになったくらい。それでも連絡はメールや電話じゃなくてライン

というのが未だに慣れない。別に電話やメールでいいじゃないか、と思うかもしれないけれど。絵文字が無くて不愛想ですね、ってことを会社で言われるけれどそんなこと知ったことか、と思う。会社の人との会話に、絵文字が必要か？そんなことを私は君に言ったよね。そのとき君は確か、時代の流れには逆らえないよ、と言っていたっけ。別に逆らうつもりはないのだけれど。家に入り、コーヒーを入れて、私は新聞を読む。香ばしい香りが漂ってくる。フレンチトーストを焼いているのだろう。ともなれば、もうすぐだ。もうすぐ、私のフレンチトーストが、君の作ったフレンチトーストがやってくる――。



「PTSD?」

「……心的外傷後ストレス障害、とでも言えばまだ理解が早いでしょうか」

白衣を着た医者は、そう言って椅子を回転させる。

彼と向き合って話をしているのは、五十代後半とみられる女性だった。女性は娘の事が心配になっているようだった。

「患者さんの恋人が……一か月前に亡くなられた、ということでしたよね。しかも、事故によって」

こくり。ゆっくりとその女性は頷いた。

患者さん、というのは彼女の娘のことだった。

「身体の傷は大したものではありません。こんなことを医者が言うのはどうかと思いますがね……いずれにせよ、身体の傷だけを見れば大したことはありません。問題は、心の傷です」

「心の……傷」

「彼女は、自分の命の危機だけではなく、目の前で恋人を失っています。それが彼女にとって強いストレスとなったのでしょう」



廊下からガラス張りになっている病室がある。

そこには一人の女性が、檻に囚われていた。

その檻には、彼女の恋人と、幸せに暮らしている環境。

今の彼女にとっては、その檻の中こそが、幸せなのかもしれない。

彼女の主治医は、彼女を治すと言いながらも、そう診察を締めくくった。

一杯のお茶をどうぞ。

珈琲にしますか？

紅茶にしますか？

当店ではお客様の様々な症状に合わせたオリジナルブレンドティーを提供しております。

一杯のお茶をどうぞ。

それからゆっくりお話をしましょう。

一杯のお茶があなたの心をあたため終えるまで、わたたくしはお付き合いたします。

さあ、こちらの席へどうぞ。

*

「マイナス五十点。今日はもう休みなさい、ニーヤ」

「はい、アリスお嬢様……」

アリス・ティーブレイクが銀のお盆にティーカップを戻すと、受け取ったニーヤ・サウザンドは明らかに肩を落として落ち込んだ。

金色の豊かな髪に、白磁の肌、ラクダを彷彿させる長いまつ毛に、誰からも「可愛い」という答えが返ってくるその容姿。先代の御茶汲み係である彼女の父が太陽系惑星の地球の文学から名付けただけあり、ルイス・キャロルの描いた『不思議の国のアリス』の主人公のアリスが実在したような幼女が、ギャラクシー船団の貴族の中でも随一の知名度と名誉を大事にしている、ティーブレイク家の当主のアリスだ。そんな幼女に冷たい眼差しを注がれて落胆するのは、先月、惑星間違法移民として船団追放を命じられた青年、

ニーヤ・サウザンド。ところどころにはつれの見られる、薄れた藍色の見慣れない衣服。これはアリスの名前の由来である地球の日本という島国の古風な文化服らしく、かつて「書生」と呼ばれた服装とか。青のベルベットのカーテンに赤の絨毯、金色の装飾があらゆるこちらに装飾をされているこの館において、彼の存在はかなり不似合いだが、主であるアリスの許可だ。

ギャラクシー船団。それは太陽系からブラックホールを三つほどこえた宇宙に存在する移住船である。一千万もの人口を抱え、都市と自然の調和のとれた船団で「貴族」の階級制度で統率されている。船団長を一等貴族、船団の運航に従事する家系を二級貴族とし、平民が最低級十位に値する。奴隷制度はないが、移民たちは階級を得ることができない。それは不当労働や違法性のある移住の予防の法律となっており、ギャラクシー船団という一個体の尊厳と治安の安定を保つ意味を持つ。遥かな昔、ギャラクシー船団の技術を費やして作られた「蓄光石」は、星の光を宿す人工鉱石として宇宙に名を広めた。現在のギャラクシー船団は、その高い技術力の輸出や整えられた制度を体験するための観光業で支えられている。

ティーブレイク家はその二級貴族に該当していた。「御茶汲み係」の名称は、ティーブレイク家でのみ使用を許可された階級職で、一級階級の団長への接見が自由に認められている。秘伝とされるオリジナルブレンドは、飲む相手に応じて配合を変えられ、その時に求められるすべての需要が一杯のお茶に注がれる。ティーブレイク家のオリジナルブレンドを味わうことは、その他の貴族の嗜みであり、同時にそこから高等階級への道が開かれるとも言われていた。先代のブラックホール管理人であったロバート伯爵が星屑感染症の末期、余命一週間と宣告された日に、最後の晩餐として口にしたのが、アリス・ティーブレイクが初めて淹れた紅茶だ。ロバート氏はまた幼いアリスの入れたまるやかで懐かしい、そしてどこか希望を胸に開かせるようなあ

たたかな紅茶の味わいに満たされ、とてもいい笑顔のまま眠った。

「つまり、一杯のお茶とは、飲む相手の心を時に突き動かし、時に穏やかにしなければならぬということ、もう何十回、何百回あなたに説明したかしら？」

天使の羽が零れ落ちるような幻さえ見えるアリスの満面の笑顔は、ほこりひとつ落ちていない絨毯に正座させられているニーヤへ向けられていた。ニーヤはギヤラクシー船団の説明からアリスの初仕事の話まで聞かされ「はい」「ええ」「そうですね」「さすがです」「なるほど」と相槌を打ってはいたが。

「……はあ」

アリスの身長には少し高い椅子から跳ねるように静かに降りる。ふんわりと広がる水色のワンピースの裾をつまみ、五センチはヒールのある黒いエナメル靴を履いた左足を勢いよく振り上げ、それより早く振り下ろす。

「ずくん！」

「ぎやあああっ！」

赤地に白の幾何学模様様が描かれた絨毯の上を、両手で頭を押さえながら転がりまわる青年に対して、アリスは百四十センチ頭上から見下す。

「あなたいま、完全に居眠りしていませんか？」

「し、してないで、す……」

「じゃあ、さっき私が羊飼いのペールへ届けたブレンドの砂糖の名前は？」

「ええと……天の川のほとりのアジサイ……」

「あほんだらあっ！」

「ずくん！」

「ぎやああああっ！」

二発目のかかと落としを頂戴したニーヤが再び転げまわる。スカートの裾を綺麗に直してから、彼に強い口調を浴びせた。

「天の川のほとりのアジサイは、砂糖じゃなくてエッセンス！ ペールは先代の羊飼いで今はペール夫妻があとを継いでいるわ。そもそもあなた、私の話なんて聞かずに居眠りをしていただけでしょう！ 物覚えは悪い！ いちいち言い訳をする！ どうしてそんなにひねくれているのかしらね！」

「こ、これは、そういう性格で……」

「男は黙ってこめんさい！」

「ずくん！」

「……っ！」

三発目はもう、悲鳴にならなかった。小柄で華やかなアリスだが、その身体能力は歩けば三日かかる地下の团长室へ、紅茶の茶葉が踊っているうちに到着する、音速とも呼べる脚力を持つ。それはティープレイク家に代々受け継がれている血統であり、彼らがその階級を守り続けられる理由のひとつだ。

「だ、だって、さっき、休めといたのはアリスお嬢様で……」

「口ごたえできる口はどこかしら？」

「すみません……」

まだ絨毯へ仰向けに転がったままのニーヤに対し、アリスはその顔をしっかりと見つめる。

「惑星間違法移民は、この銀河から追放される極刑なのよ？ それを免れたのは誰のおかげだと思っているの？」

「アリスお嬢様です」

「理解はしているようね」

「頼んではいけません」

「絨毯のしみになりたい？」

「すみません……」

高圧的なアリスの態度に意見するものの、意志薄弱ととれる彼の挙動で

はかなうはずがなかった。

「あなたには最初から期待なんてしていなかったけど、まさかここまで才能がないとは思わなかったわ」

「すみません……」

「もしあの場に私が居なかったら、あなたは路頭に迷うだけじゃなく、故郷に戻ることもできず、別の銀河へ行くことしかできず、一生家族にも会えずに終わったでしょうね」

「……」

「このギヤラクシー船団へ移住届を出すにあたって必要な書類をひとつも持っていないなんて、そもそも、あなたは何をしにこの船に来たのよ」

「……」

「確かに、人には話したくない理由もあると、私にはわかるわ。いままでのお客様の中にも、苦渋の選択をして、それでもこのギヤラクシー船団で蓄光石の技術を学びたいと、家族を捨ててやって来た方もいたわ」

「……うん」

「あなたがそこまで我慢しているのだから、本当は理由があるのでしょうか？ そろそろ話してくれても、いいんじゃないかしら？」

「……くかー」

「そうね。そうよね。あんたみたいな馬鹿には私の部屋の絨毯でさえ極上のマットレスに早変わりよね！ 大馬鹿者おっ！」

今夜もアリスの怒号が響いた。

*

「おはようございます、アリスお嬢様。朝のカフェオレをお持ちしました」

「……だれが午前中におこせと仕事か私を呼んでいないにもかかわらず」

「そうですね、本日はまだご依頼は無いようですが、十時には必ず起こすよ

うにと、お嬢様自身から承った僕の仕事ですのよ」

「……ないようは、ないよう」

「お嬢様、早くご自身で起きていただかないと、布団をはがすようにメリー婦人をお呼びしなければなりません」

「それは、ひどいことに、こまる」

ニーヤは昨晚と同じ服装で清々しい笑顔をたたえている。一方、アリスは頭のでっぺんまでかぶった布団から出てこようとしなかったが、最終的にニーヤの脅し文句に屈した。

ぼさりと無理矢理覗とぼした布団が三メートル先の絨毯へ着地すると、金色のぼさぼさとした長い髪の毛の、十代前半に見える少女がベッドにいた。清楚で純真無垢な雰囲気は一切なく、どこかのヤンキーかと思間違えそうな目付きの悪さだ。胸元に大きく黒猫のイラストが描かれている灰色のTシャツはしわくちゃで、そこから伸びる足をベッドの天蓋へ向けて「よっ」と声を出しながら振り子の原理で起き上がる。

「あの、僕は一応成人男性に部類しているのですが……」

「なんかもんくあるのかばかやろーだんかんこのやろー」

「いえ、だいが、なれました……」

言っていることは意味不明。幼いわりに発達した胸元や、ほどよい肉付きの手足を無防備に見せつけられているニーヤには、視線をそらすことしかできない。

「……アリスお嬢様」

まだ脳みそが機能停止中なのか、口のはしのよだれのあとを気にしていない。頭を上下に揺らして、このままでは再び眠りにつきそうな主人に向けて、ニーヤはひとつため息をついてから、渾身の一言を放った。

「若く見えても僕と同じ年なのですか」

「サマーソルトキック！」

「らああっ！」

最後まで発言を許されることはない。持っていたお盆を取り上げられ、さらには下からのためキックを頸に頂戴され、彼は絨毯へ沈む。ついでにお盆は頭の上に落ちてきた。

(理不尽だ……)

顔を上げると、キングベッドに腰かけながら、ニーヤの持ってきたカフェオレをめんどくさそうに彼女は飲み始める。それは真正銘のアリス・テイーブレイクであり、昨日は十歳ほどの幼女に見えていたその人は、実年齢は三十二歳であった。ギヤラクシー船団の技術は発展の一途をたどるかのよう
に思われた。しかし、進みすぎた技術の人工遺伝子が選んだのは高度な才能を引き換えにした、早期寿命。つまり、ギヤラクシー船団で生まれ育った種族はみな、優秀であるがゆえに短命。男女ともに十五歳を成人としており、平均寿命は四十〜五十歳。先代のアリスの父、ディンブラ・テイーブレイクは船団長お墨付きの御茶汲み係として名を残したが、いまのアリスと同じ年齢、三十二歳のときに亡くなった。当時、アリスは十二歳だった。父親の死を理解し、受け入れ、テイーブレイク家の名を絶やすことなく、成人前に当主を引き継いだ。それから二十年、アリスはギヤラクシー船団のみならず、遠く離れたブラックホールの管理人にまで懸念にされるほどの腕前とセンスを保ち続けてきた。船団の観光業の一部では、彼女のオリジナルブレンドを味わうツアーまで組まれている。もちろん、その見返りとして他の感星や船団にしかない茶葉やスパイスなどの輸入の許可を正式に得てある。

彼女はそこまでしてこの家を守りたかった。だが、必死になっているうちに、自分の遺伝子を残すという発想を忘れてしまっていたのだ。気づいたのは三十を迎える手前。ブラックホール管理人の息子から求婚をされたとき。

「このままひとりで死ぬつもりですか？」

ひとり、という言葉がはつきりとアリスの胸に突き刺さった。その話は丁重にお断りしたもの、テイーブレイク家の存続と自分の余生について考え始めるきっかけとなった。結婚に対して願望や理想がなかったわけではない。そういう場に呼ばれ、祝いの御茶を振る舞うことなど、一カ月に一回は必ずある。そろそろ相手を探すべきか。それとも有能な孤児を引き取って教育をすべきか。時間が無いと思っ
ているうちに、自分の寿命について考える年齢になってしまっていた。

(仕方がないさ。その時はメリー婦人の三男坊あたりに、私の脳細胞移植の手術を受けてもらって、この家を継いでもらおう)

ギヤラクシー船団の医術には、脳の遺伝子を引き継ぐ、つまり才能を移植する手術がある。双方同意の元で行われるのが原則で、才能移植手術には副作用が少なく、多くの場合、子供を持てなかった夫婦や結婚せずに後継者を残したい、アリスのような人間が利用する。人権や法律を違反するようなものではないので、短命なギヤラクシー船団の優秀な技術や才能を後世に残す重要な手段として積極的に取り入れられている。

がしょん！

ぼーっと物思いにふけていたアリスの耳に、レトロな機械音が混入する。小型のシュレッダーか何かと思っていたが、上部から茶色のものがぞいていた。

「パンが焼けましたよ」

いつの間にか立ち直っていたニーヤがそれに近づき、ひよいっと取り出したのは、きれいなきつね色に焼けている食パンだった。慣れた様子でトーストされた食パンを皿にのせると、バターとイチゴジャムとあんこを取り分けた小皿と、少量の蜂蜜のボトルを次々とお盆に移す。香ばしさと甘酸っぱさ

とが近づいてきて、アリスの脳がゆっくりと覚醒していく。ベッドサイドのテーブルにそれらを綺麗に並べられて、湯気のたつ食パンが唾液を誘発する。

「カフェオレはもう一杯飲みますか？」

「飲む」

頭を大きく振って頷くと、ニーヤが少し笑った。すぐにドリップしたコーヒーに砂糖を二杯と牛乳をたっぷり混ぜたカフェオレを用意され、アリスの空腹は限界だった。

「どうぞお嬢様、召し上がってください」

「いただきます！」

ぱん！と両手を合わせた綺麗な音を響かせて礼をすると、アリスはまずトーストをそのままかじった。かりっと奥歯で噛み砕かれる音が、後頭部へ響く。

「なんだこれは！」

「え、トーストですけど……」

「いつの間に、どうやって、この部屋で！」

「あー、それは。僕の故郷にトースターという機械がありまして、それに食パンを入れてスイッチを押すと、時間がたてば自動的に焼きあがったパンが出来上がります」

「なん……だと……」

「まあまあ、それよりさめちやいますよ。食べてください」

「わかった」

促されるままにバターを塗り、蜂蜜をたっぷりとかける。トーストにバターと蜂蜜という組み合わせが、アリスは好きだった。甘じよっぱさが口いっぱいに広がれば、このバターを作るために乳を搾られた牛と、この蜜を集めてきた蜂たち、すべての生き物への感謝が惜しみなく溢れだす。これが命を

食べるということなのだ。と、アリスは小皿にあんこがのっていることによく気付く。

「ニーヤ、あんこはデザートにのせるものなの？」

「いえ、本来はトーストに挟んで食べるのですが、乗せて食べてもおいしいかと思つて、昨日買い出しに出たついでに買ってきてみました」

「トーストに、あんこ？」

「はい。僕の故郷の郷土料理みたいなものです。よかったら食べてみてください」

この青年は不思議なところがある。自分の出生やギャラクシー船団への入船理由をいまだ語らず、カフェオレの砂糖とミルクの配合は、二十年以上アリスの世話をしてきたメリー婦人よりも好みの濃さと甘さを提供した。そしていま、この未知な食べ方をアリス・タイプレイクにすすめるのだ。

(不味かったらクビね)

バターを少量塗ってから、遠慮せずにと言われて山盛りに乗せたあんこ。こんな光景はいまだかつて見たことがない。トーストにあんこ。朝からそんながつりした甘いものを食べられるわけがないだろう。だが、ここで食べられないと拒否するのは、好奇心に負けた気分になる。ならば。

「いただきます！」

がふり。下顎にトーストの固さが伝わり、上顎にあんこのふんわりとしたやわらかさが伝わる。大きく開けて含んだ一口を、噛んで、噛んで。

二杯目のカフェオレを口の中に流しこみ、口の中には余韻が残る。懐かしいような、新しいような、なんだか泣き出してしまいたいような味わい。甘じよっぱさと。もう一度返ってくる甘さ。なんと表現したらいいのか、これは。

カフェオレをもう一口飲む。砂糖はデイスプーンの高盛り二杯の三温糖。牛乳とコーヒーは1対1。猫舌のアリスにはちょうど良い温度。隠し味にち

よっとだけ百貨蜜が入っている。

「お嬢様！ アリスお嬢様！」

「え？」

マグカップとトーストで両手がふさがっていた彼女の頬が濡れていた。しかも、それは顎まで到達してぼたぼたと膝に水滴を落としている。

「あ、あれ？」

「すみません！ 僕が余計なものをお出ししたばかりに！ いますぐ廃棄します！」

「ちがう、ちょっとまって、これ、おいしいんだから」

「おいしい、ですか？」

「美味しいわよ、このアリス様の味覚を信じなさい」

最初から不思議だった。船団ターミナルに出張御茶汲みに行った際、惑星間違法移民と騒がれていた青年を、自らの手違いで申請を忘れていた見習いだと嘘をつき、その身柄を引き取ったこと。本人はギャラクシー船団の法律やルールを一切知らなかったこと。だが入船してきた理由は語らないこと。そのまま住み込みで教育しても、ティープレイク家の技術がまったく身につかないこと。なのに、アリスに毎朝差し出す一杯のカフェオレが、彼女にとって欠かせないものになってしまったこと。そして今朝は小倉トーストなる食の文化に触れた。何も知らずにこの船団にやってきたはずの青年が、いつの間にかアリスの心の中にまで入ってこようとしている。

これはいったい、なんなのだ。

考えながらも、あんこを追加して乗せて食べきったトーストの皿をお盆に戻し、カフェオレの最後の一口をぐっと飲みます。

「ごちそうさまでした。ニーヤ、今日の予定は？」

「確か本日はまだ依頼は入っていないかと思えますが、もう一度確認して

きます」

「そうしてちょうだい。もし午後からにも予定がないようだったら、少なくなってきた砂糖の調達に行くから付き合いなさい、荷物持ちとして」

「はい、わかりました」

「あと、三番通りにスコーンの美味しい店がオープンしたから、味を確かめに行くわよ」

「スコーン……僕に味がわかるかどうか」

「あなたはついてくるだけでいいのよ」

マグカップをお盆に置いて、ニーヤに突き出す。彼は当然のことく受け取ってそれを片付けるために部屋を出ようとする。

「それから、あなたの話を聞かせて」

「え？」

「よく考えたら、ニーヤのことなにも知らないわ。それにあなた、ギャラクシー船団のこと、なにも知らないでしょう。私がどうしてこんなに若く見えるのかも」

「……はい、僕は、何も知りません。すみませんでした」

「謝罪なんて要求してないわ。身支度をするから早く部屋から出て行って。それとも別の意味でお互いを知り合いたいのか？」

「いま！ すぐ！ 片付けてきまふ！」

耳の先まで真っ赤になったニーヤが大慌てでお盆を抱え、カップを落としそうになりながらも部屋を退散する後姿を見て、アリスはベッドに転がり腹を抱えて笑った。三十二にもなつて、そんなんでどうするのよ。私が居なかつたらどうするつもりだったのよ。これからもどうやって生きていくつもりよ。

私が居なきやダメなんだから、あの馬鹿。

参加者一覧（掲載順）

古井久茂(@fulidom)

個人サークル fulidom 代表の古井久茂です。

我々はいつまで個人サークルでなければいいのか毎夜毎夜枕を濡らしております。新規メンバー募集中です。

小説や短歌の依頼も受け付けています。あなたの依頼をお待ちしております。ページを開けばそこにいる、古井久茂でした。

ボンゴレーノ麴(@peperoncino_k)

夏号ということ、なぜか素麺を作るはずがうどんになってしまったのは、平均的なリーマンに素麺を作るスキルはないだろう、と考えたからです。夏は

素麺。いいですよ。薬味にワサビと、ちよつと梅干しなんかあると最高です。

篠田くらげ(@samayoikurage)

初BLを書きました。色々至らなくてすみません。楽しんでいただけたら今後とも挑戦していきたいです。

豆崎豆太(@qwerty_misp)

ゲスト参加は一切集まらなかったし立てたメイテイは使わなかったしびーえ
るやってカブるとは思わなかったし誤算ばかりの夏号でした。ゲスト参加、
次回こそは、お待ちしております（平身低頭）

巫夏希(@natsuki_miko)

今回はフレンチトーストのお話。そういえばこの前自分でフレンチトーストを作りました。想像以上に美味しくできたので才能あるな！ って自分を自分で褒めました。今回の話は前回のあとがきで書いた予告とは別物になっちゃいました。そんなことは知りません。それでは、また。

くん(@N2_tsun)

今回はギャラクシー船団の短編を書いてみました。お楽しみいただけますように。

companion vol.2

<http://p.booklog.jp/book/108154>

著者 : qwerty-misp

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/qwerty-misp/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/108154>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/108154>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ